幾世幾年流

れ けん

さざめく小河春告げ めぐる月日の尾車や

あはれ幸ある北の国 Ź

Ŧi.

薫る微風身にうけてかほといれて 常世の春を偲べかし が丘に打ち臥して

岸辺静けき夕まぐれ 銀河に似たる石狩の 洋々声なく野をこえて 永劫隔つ後までもえいごふくだのち

導く星を仰がずや

の塵の跡を絶ち

迷ひの羈絆解きほどき 無窮を照らす最高のむきゅう 清き真理の渚より つ光明を探り得て

島根に高いたが

壮なる勝歌を

く勇ましく

曠野に練へし心身も 白き朔風われにあり 健児よいざや奪ひ起て 一百意気みつ北蝦夷のいのひゃくいき

闇を排し 理想の郷を拓く可しりをうっくに、ひらって して永遠 0

蕭々寒き冬景色 万象淋しく装

ひひて

天地もゆらぐすさまじさ 毘嵐万里をかけりて 惰眠をさます 雪嵐

は

柳沢 木 (秀雄 原均 君 君 作 作歌 Ж